

平成28年度

学校教育指導の重点

【教科・領域・各種教育】編



福島県教育庁県中教育事務所

目次

1	全体構想図	1
2	特別支援教育	2
3	幼稚園教育	3
4	小中学校教育	4
(1)	各教科等	
①	国語	4
②	社会	5
③	算数・数学	6
④	理科	7
⑤	生活	7
⑥	音楽	8
⑦	図画工作、美術	8
⑧	体育、保健体育	9
⑨	家庭、技術・家庭	10
⑩	外国語（英語）	10
⑪	道德	11
⑫	外国語活動	12
⑬	総合的な学習の時間	13
⑭	特別活動	13
(2)	各種教育	
①	生徒指導	14
②	キャリア教育	15
③	図書館教育	15
④	人権教育	16
⑤	環境教育	16
⑥	情報教育	17
⑦	国際理解教育	17
⑧	へき地・小規模学校教育	18
⑨	健康教育	18
⑩	防災教育	19
⑪	放射線教育	19

平成28年度 県中教育事務所 学校教育指導の重点(全体構想図)

<基本理念> 第6次福島県総合教育計画

“ふくしまの和”で奏でる、こころ豊かなたくましい人づくり

<基本目標>

- 1 知・徳・体のバランスのとれた、社会に貢献する自立した人間の育成
- 2 学校、家庭、地域が一体となった教育の実現
- 3 豊かな教育環境の形成

子どもの「ゆめ」
保護者の願いが
かなう教育

— 目指す子ども像 —

- 1 一人一人の個性が十分引き出され、伸ばされている。
- 2 一人一人に「確かな学力」が身に付いている。
- 3 一人一人が自分らしい生き方を実現できている。

— 学校教育支援の基本方針 —

- 1 「生き抜く力」の育成を目指した助言・支援
○「確かな学力」の向上 ○「豊かな心」の育成 ○「健やかな体」の育成
- 2 市町村教育委員会との連携 ○各種要請訪問
- 3 教職員の資質・能力の向上を目指した助言・支援
○校内研修会への参加 ○各種研修会・講習会の充実

「まなび」「きずな」「そだち」をつなぐ学校教育への支援

「豊かな心」の育成

<道徳教育の充実>

- 指導体制の確立と価値項目における学校の実態を踏まえた重点事項の設定
- 全体計画や「別業」を活用した教育活動全体で取り組む道徳教育の推進
- 道徳の時間を「要」とした、心に響く多様な授業展開の工夫と自己を振り返る場の確保
- 道徳の授業公開、学校からの情報発信による家庭・地域社会との連携の推進

<生徒指導の充実>

- 全教職員で取り組む機能的な指導体制の確立
- 「組織的・連携」をキーワードにしたいじめ・不登校等の未然防止・早期発見・早期対応
- 積極的な生徒指導による、よりよい人間関係づくりと心の居場所づくり
- カウンセリングマインドをもった教育相談の充実と継続的な心のケア（SCの活用）
- 家庭・地域・関係機関等との実効ある連携・協力（SWRを活用した環境への働きかけ）

「確かな学力」の向上

継続的な検証改善サイクルの確立と実効ある日常の取組

<授業の充実・改善、研修の充実>

- 思考力・判断力・表現力をはぐくむ主体的・協働的な授業づくり
(深い児童理解と確かな教材分析によるねらいの明確化と言語活動の充実)
- 授業の質的改善に結び付く校内研修の充実
(改善検証サイクルを生かした、協同的・組織的な校内研修)
- 基礎基本の定着と活用力の育成
(定着確認シートの効果的な活用)
- 個に応じたきめ細かな指導
(少人数教育の効果的な実施)
- 科学的・数学的な思考力を育成する理数教育の推進

<学びの基盤づくり>

- 主体的な学びの基盤づくり
(生徒指導の機能を生かした集団づくり・活用型学習の推進)
- 生活習慣・学習習慣の確立
(つなぐ教育の普及・充実)
・ 学びの連続性を大切にした幼小中連携
・ 地域の共にはぐくむ、自己有用感の高い児童生徒の醸成
- 生き方に結び付く教育活動全体でのキャリア教育の推進
- 読書活動の充実における学校図書館の計画的・多面的な活用 (居場所、読書センター、学習・情報センターとして)

「健やかな体」の育成

<体力の向上に関する取組の充実>

- 体育・保健体育の授業の充実 (運動身体づくりプログラムの自校化と準備運動の工夫、運動量の確保)
- 特設クラブ・部活動、体育的行事の充実 (外部指導者や地域人材の活用等)
- 日常的な運動習慣の確立

<食育・健康教育の推進>

- 食育推進コーディネーターを中心とした校内委員会の活性化
- 学校給食を活用した食育の推進
- 「早寝早起き朝ごはん」の推進 (朝食摂取率の向上)
- 自校の健康課題把握と解決に向けた取組
(「肥満」「う歯」「こころ・性」に関する教育の充実)

<自分手帳の活用>

- 教育課程に位置づけた活用の推進

<幼児児童生徒の安全確保>

- 危険箇所修繕等、安全な学習環境の整備 (通学路の安全点検と確保)
- 自ら考え、判断し、行動する力を育む防災教育と放射線教育の推進

- 学びの連続性を踏まえ、幼児の主体性を大切にする保育の充実

「つながる幼稚園教育」の推進

- 幼稚園、家庭、地域社会との連携

- 一人一人の特性に応じた指導支援の充実
(本人・保護者との丁寧な教育相談、ケース会議の実施、合理的配慮の確認、個別的教育支援計画・個別の指導計画の活用、教員同士の連携とチーム支援、異校種間の密接な連携)

- 関係する機関と連携した支援の充実

- 交流及び共同学習の計画的・継続的な実施

特別支援教育の充実：一人一人の学びを大切にした「地域で共に学び共に生きる教育」の実現を目指して

教職員の資質・能力の向上

- 同僚性や協働性を高める校内研修
- 教職員人事評価システムとの連動
- 学校間の指導法交流

学習指導要領の趣旨の実現を目指した教育課程の編成・実施・評価・改善

- 特色ある学校づくりの推進
- 説明責任と開かれた学校づくり
- 日常的な自己評価と外部評価の実施

2 特別支援教育

特別支援教育（幼・小・中）

指導の重点	実践上のポイント（○）関連する事業等（※）
<p>【交流及び共同学習】</p> <p>2 小・中学校等の児童生徒との共同学習を通して、教科等のねらいが十分達成できるよう、教育課程に基づいた計画的な学習が展開できるように工夫する。</p>	<p>○ 各教科等のねらいを焦点化し、児童生徒一人一人の学習内容を十分に検討することで、主体的かつ共同で学習できるようにするため、関係する教員同士が授業づくりについて話合いの機会を設ける必要があります。その際に、特別支援学級の児童生徒についてのケース会議を積極的に実施し、話し合いをもとに「個別の教育支援計画」「個別の指導計画」の追記や改訂を行う必要があります。</p>
<p>【通常の学級に在籍する特別な支援を必要とする幼児児童生徒の教育】</p> <p>2 「個別の教育支援計画」を作成・活用して学校、家庭、地域及び医療等関係機関との連携を図る。</p> <p>3 「個別の指導計画」等を作成・活用した個に応じた指導を進めるとともに、指導法の工夫を図る。</p>	<p>○ 学校は、保護者や本人との教育相談を丁寧に行い、本人や保護者のニーズを確認することが必要です。さらに必要に応じて本人や保護者の支援に関係する機関と連絡を密にしながら、今までの支援の経過についての情報を集めたり、相談支援ファイルや個別の教育支援計画等を確認したりすることが必要です。</p> <p>○ 校内委員会や校内で実施するケース会議では、特別な支援を要する幼児児童生徒の実態について、普段の学校生活の様子等から「できること・得意なこと」「できないこと・苦手なこと」「教育的ニーズ」について整理をし、個別の教育支援計画や個別の指導計画へ必要事項を記載していくプロセスが大切です。特に、教育的ニーズや支援の目標や手立て、合理的配慮の確認、支援の評価については、本人や保護者と共有することが大切です。</p> <p>※ 必要に応じて、巡回相談や特別支援学校のセンター的機能を活用してください。</p>
<p>【特別支援学級・通級指導教室】</p> <p>児童生徒の障がいの多様化を考慮し、一人一人の教育的ニーズを的確に把握し、それに基づいた指導の充実を図る。</p>	<p>○ 児童生徒の実態に合った指導目標や指導内容とするために、校内委員会（ケース会議等）において通常学級の担任も参加してもらい、多面的な視点での話合いを充実させましょう。</p> <p>○ 特別支援学級の授業研究会を積極的に公開し、学校全体で特別支援学級の授業について、話題にし、実際に話しあうことが大切です。その際に、教育課程のことや「教科等を合わせた指導」「自立活動」等について、参加された教職員が理解を深める必要があります。</p> <p>※ 授業研究会等では、特別支援学校のセンター的機能を活用ください。</p>

3 幼稚園教育

幼稚園教育

指導の重点	実践上のポイント（○） 関連する事業等（※）
1 幼児が環境に主体的にかかわり、発達の時期にふさわしい生活が展開できるように、長期的見通しをもった指導計画を作成する。	<ul style="list-style-type: none"> ○ 小学校との連続性を踏まえるとともに、目指す幼児像を明確にした上で、保育内容を工夫した指導計画を作成しましょう。 ○ 幼児が環境に主体的にかかわるために、教師が幼児の理解を深め、目指す幼児像に向かって、意図的に環境を構成しましょう。 ○ 幼児教育が生涯にわたる人格形成の基礎を培うものであることを念頭に置いて、教師は幼児の思いを大切にしながら幼児期にふさわしい教育が展開できるようにしましょう。また、幼少接続にも積極的に参画しましょう。
2 一人一人の活動の場面に応じて、教師が様々な役割を果たし、幼児の主体的な活動が確保されるような保育の展開に努める。	<ul style="list-style-type: none"> ○ 人的環境として、教師は幼児の主体的な活動を促すために環境の構成を工夫したり、意図的なかかわりをもつようにしましょう。特に幼児は協働して遊ぶことで他者とのかかわりを深めたり、葛藤やつまずきを経験したりします。教師が適切にかかわることで幼児は気持ちの調整の仕方を学ぶことができます。 ○ 遊びを通した幼児の活動の様子を常に見取り、幼児の思いに寄り添いながら、発想を生かす等の発達の時期にふさわしい活動ができるよう、教師は意図的なかかわりを工夫しましょう。
3 幼児の育ちつつある面やよさに目を向けた評価を行う。	<ul style="list-style-type: none"> ○ 日常的な記録を生かして、幼児一人一人の特性に目を向け、幼児の変容を捉えて評価しましょう。 ○ 複数の教師や指導者が幼児にかかわる機会を設定し、幼児の姿を多面的に捉えて評価しましょう。 ○ 幼児一人一人の目標を具体化し、目的達成のための教師のかかわりについて学校評価等を活用し、評価と修正を繰り返しながら、指導の改善をしましょう。

4 小中学校教育
(1) 各教科等

① 国 語 (小・中)

指導の重点	実践上のポイント (○) 関連する事業等 (※)
1 小・中学校9年間の目標及び内容の系統性を十分に踏まえるとともに、学校や学年の児童生徒の実態に応じた指導計画を作成する。	<ul style="list-style-type: none"> ○ 9年間の学習内容の系統性と児童生徒の実態を踏まえ、それぞれの単元で身に付けさせたい言語の力を明確にした学力向上プラン等に改善することが大切です。 ○ 各学年の発達段階に応じて、言語活動でどのような思考力・判断力・表現力を身に付けさせたいのかを明確にするとともに、各領域の学習内容が互いに関連し合うよう指導計画を充実していくことが大切です。
2 児童生徒一人一人が日常生活(社会生活)に必要な国語の能力の基礎を確実に身に付けることができるよう指導方法を工夫する。	<ul style="list-style-type: none"> ○ 教師のねらいと共に児童生徒の疑問を生かすことで、学習に必然性を感じ意欲が高まるよう学習課題を提示することが大切です。 ○ 児童生徒個々の考えを引き出し、つなぐ発問、比較し、共通点や相違点の気づきが思考の広がりや深まりを生み出す話し合いになるよう児童生徒主体の学習活動にしていくことが大切です。 ○ 話し合ったことを基に、自分の考えを改めて再構築させることが大切です。特に、言語活動によって自分の考えがどう変容したかをノートに記録することで、授業での学びを実感することにつながります。 ○ 図表や資料から必要な情報を選んで考えをまとめたり、条件に従って考えをまとめたりする学習を大切に、定着確認シートを活用した学習を計画的に行う必要があります。 ○ 授業での「話す・聞く」「書く」学習活動が、日常生活に生かされるよう計画し、児童生徒が実践を積み重ねていくことが大切です。
3 児童生徒一人一人のよさや可能性を伸ばし、言語意識を高める評価を工夫する。	<ul style="list-style-type: none"> ○ 終末の振り返りで、達成できている点や改善点などを児童生徒が具体的に理解し、次の学習への意欲が喚起されたり、新たな目標が設定されたりするような評価活動を行うことが大切です。 ○ 児童生徒主体の学習活動であったか、ねらいとまとめは整合性がとれていたか、まとめの時間は確保されたか、言語活動のねらいは達成できたか等、授業づくりの視点で授業を見直すことが大切です。

② 社 会 (小・中)

指導の重点	実践上のポイント (○) 関連する事業等 (※)
<p>1 (小) 児童が主体的に社会的現象の意味を追究する中で、基礎的・基本的な内容を確実に身に付けることができるよう指導計画を改善する。</p> <p>(中) 各分野間の関連を図り、学校の実態に即して適切な指導計画を作成する。</p>	<p>○ 児童生徒が課題意識を持続させながら主体的に学んでいくことができるよう、単元を貫く課題を設定し、単元の再構成も含めた指導計画を作成していきましょう。そのためには、学習指導要領に基づいてねらいを明確にし、指導内容を精選・重点化することが大切です。</p> <p>○ 小・中学校における学習指導の系統性や三分野間の関連性を踏まえた指導計画を作成していきましょう。</p> <p>○ 定着確認シートの活用も指導計画に組み入れ、授業や指導の改善に活用していきましょう。</p>
<p>2 (小) 学び方や調べ方の指導を重視して、児童自ら目的意識をもって問題解決に取り組む授業を展開する。</p> <p>(中) 学び方や調べ方の学習、作業的、体験的な学習や問題解決的な学習などを工夫し、生徒の主体的な学習を一層推進する。</p>	<p>○ 教師と児童生徒とのやり取りや伝え合い、教え合いに終始することなく、児童生徒が根拠を明確にして話し合うことによって考える場を設定できる課題や学び合いの在り方を工夫したり、指導過程を工夫したりしましょう。</p> <p>○ 主体的に問題解決に取り組み、社会科のおもしろさやみんなで学ぶことの有効性を共有することができるよう、課題に対する予想や調べ方、学び方を見通す時間と場を設定するとともに、本時の学習から得られた気づきも含めた振り返りの時間を確保しましょう。</p>
<p>3 評価の趣旨を踏まえて、児童生徒のよさや可能性を伸ばす評価を充実する。</p>	<p>○ ねらいを明確にするとともに、児童生徒のどのような姿がねらいを達成できたことになるのかを明確にして評価をしましょう。</p> <p>○ 教師だけでなく、児童生徒が自己評価・相互評価し、自他のよさを認め合うことができるようにしましょう。</p>

③ 算数・数学

指導の重点	実践上のポイント（○） 関連する事業等（※）
1 基礎的・基本的な知識及び技能を確実に身に付け、数学的な見方や考え方の育成を図るために、実態に応じて指導計画を工夫する。	<ul style="list-style-type: none"> ○ 客観的な資料を基に児童生徒の実態を把握するとともに、内容の系統性を踏まえて指導内容の重点化を図ったり、配当時数を工夫したりしましょう。 ○ 年間指導計画に基づいて計画的に授業を実施することで、全領域の指導に必要な時数の確保に努めましょう。 ○ 定着確認シートを教師自身が解くことで、単元全体で求められている学力を理解するとともに、定着確認シートの問題を活用した授業を指導計画に位置付けましょう。
2 算数的・数学的活動を通して基礎的・基本的な知識及び技能を確実に身に付け、数学的な見方や考え方の育成を図るために、思考過程を大切にしたい授業展開に努める。	<ul style="list-style-type: none"> ○ 主体的に問題解決を図るためには、児童生徒から問いを引き出す教師の構えが大切です。 ○ 授業の中に自分や友達の考え・根拠等を書く活動や説明する活動を位置付け、教師の「問い返し」等を通して、児童生徒の思考過程を共有・吟味する教師のコーディネートが必要です。 ○ ティームティーチングや習熟度別学習等も計画的に位置付けながら、個に応じた指導を充実しましょう。 ○ 算数・数学科コアティーチャーによる授業研究会が開催されますので、積極的な参加をお願いします。 ○ 算数・数学科への学習意欲の更なる向上及び知識・技能を活用して課題を解決する力の育成を目的とした、算数・数学ジュニアオリンピックが開催されます。
3 よさや可能性を見いだし、伸ばす評価を工夫し、指導と評価の一体化を図る。	<ul style="list-style-type: none"> ○ ねらいが達成された児童生徒の具体的な姿を明確にすることが大切です。 ○ 児童生徒の発言や記述の中にある数学的な見方や考え方を見取り、意図的に価値付け、共有しましょう。 ○ キーワードを使ったまとめや適用問題により、実感を伴ったまとめとなるように工夫しましょう。

④ 理 科 (小・中)

指導の重点	実践上のポイント (○) 関連する事業等 (※)
1 観察、実験に基づく主体的な活動を重視した指導計画を作成する。	<ul style="list-style-type: none"> ○ 小・中・高等学校の学習内容の系統性を踏まえた指導計画を基に、児童生徒が主体的に取り組む観察・実験を位置付けましょう。 ○ 理科学習指導プランやプランに基づく理科コアティーチャーの授業を参考にして授業を工夫、改善しましょう。
2 問題解決の能力を育て、科学的な見方や考え方を養うための指導法の工夫に努める。	<ul style="list-style-type: none"> ○ 導入で立てた児童生徒の予想を基にした考察の時間を確保できるように、学習内容や観察・実験の時間のバランスを考えた授業を工夫しましょう。 ○ 結果を表やグラフに整理したり、科学的な言葉や概念をもとに話し合ったりする活動を充実させましょう。 ○ 小中学校観察実験技能指導DVDを活用して、実験・観察器具の扱いに慣れさせ、正しく安全な観察・実験ができるようにしましょう。
3 よさや可能性を積極的に見だし、伸ばす評価を工夫する。	<ul style="list-style-type: none"> ○ 発言・ノート等による科学的な見方や考え方や、実験・観察への取り組み方等における児童生徒の良さを称賛し、周囲へ広げていきましょう。 ○ 学習内容と日常生活との関連を意識できるように、ニュース・新聞等から取り上げたり、身近な道具や将来の生活へ結び付けたりして考えさせましょう。

⑤ 生 活

指導の重点	実践上のポイント (○) 関連する事業等 (※)
1 児童の思いや願いをはぐくみ、意欲や主体性を高めることができるような2年間を見通した指導計画を作成・改善する。	<ul style="list-style-type: none"> ○ 児童の思いや願いをしっかりと受け止め、それを基に指導計画を入れ替えたり、組み合わせたりする工夫が大切です。 ○ 幼稚園教師と小学校教師が、互いの授業参観や交流を通して学び合い、幼児教育が義務教育の基礎を培っているという発達の連続性を踏まえた指導計画、幼児期の教育との接続を意識したスタートカリキュラムを生活科を核として作成をしていきましょう。
2 児童が対象とのやりとりを通して、充実感、達成感、自己有能感、一体感などを感じ取ることができるような学習の展開を工夫する。	<ul style="list-style-type: none"> ○ 児童同士、児童と教師が話し合いながら、身近な対象と繰り返しかわり、自分の気付きを振り返ることによって、気付きの質を高めたり、次の活動への意欲を高めたりできるような学習の展開を構築していくことが必要です。 ○ 児童同士で気付きを言葉にして伝え合ったり、それを基に自分の活動を見直したりすること、身近な人々と繰り返しかわることなどを意識して進めていくことが大切です。
3 児童一人一人の思いや願いの実現の程度を把握しながら指導に生かし、自信や意欲につなげる評価を工夫する。	<ul style="list-style-type: none"> ○ 発言やつぶやき、行動、作品等から、個々の内面、活動・体験の広がりや深まりを把握し、次の指導に生かしていくことが大切です。 ○ 児童の自信や意欲につなげる評価とするために、児童自身・児童相互でそのよさを認め合うことができる場作りが大切です。さらに、具体的な子どもの姿を評価基準として評価することが重要です。

⑥ 音楽（小・中）

指導の重点	実践上のポイント（○） 関連する事業等（※）
1 音楽活動の基礎的な能力を培えるよう、指導計画を改善する。	<ul style="list-style-type: none"> ○ 各題材で育成する力を明確にし、表現活動と鑑賞活動の関連が図られた指導計画を作成しましょう。 ○ 学校行事との関連を図りつつも、指導領域や4つの活動が特定の分野に偏ることなく配置された年間指導計画を作成していきましょう。
2 児童生徒が音楽活動を楽しみ、音楽活動の喜びを味わい、自ら進んで学習に取り組めるような指導方法を工夫する。	<ul style="list-style-type: none"> ○ ねらいを明確にし、発達段階に合わせた児童生徒が主体的に取り組める課題を設定し、児童生徒が楽しみながら意欲的に活動できるようにしましょう。 ○ 自分たちの音楽活動について話し合うなど、学び合う場を設定し、意欲的に音楽活動に取り組み、楽しみながら協働して高め合っていくことができる授業展開を工夫していきましょう。
3 児童生徒と音楽とのかかわりを深め、児童生徒一人一人の学びを支える適切な評価を工夫する。	<ul style="list-style-type: none"> ○ 課題の設定にあたっては、何ができるようになるべよいかという、ねらいを達成した具体的な姿が見える表現にし、児童生徒が自ら振り返ることで意欲につなげていくことができるようにしましょう。 ○ お互いのよさを認め合うことができる場や学習形態を取り入れ相互評価することで、友達とよさを共有できるようにし、改善に生かしていけるようにしましょう。

⑦ 図画工作、美術

指導の重点	実践上のポイント（○） 関連する事業等（※）
1 表現及び鑑賞等の活動を通して、児童生徒一人一人に育成すべき資質や能力を明確にするとともに、個性を生かして、主体的・創造的に学習できる指導計画を作成する。	<ul style="list-style-type: none"> ○ 児童生徒の実態に応じ、育成したい資質や能力と学習内容を明確にするとともに、学校種の連続性や学年間の見通しをもって、指導計画を作成しましょう。 ○ 児童生徒が自分の思いを持ち、個性を生かしつつ、それを表現できる指導計画を作成しましょう。 ○ 児童生徒の作品や親しみのある作品等の展示を工夫することで、造形的な創造活動が日常の中に取り入れられるようにしましょう。 ○ 適切な環境のもとで授業を展開するとともに、道具や薬品等の安全指導と保管に十分留意しましょう。
2 児童生徒の感性を働かせながら、つくりだす喜びを味わわせるとともに、自分のよさを発見し、喜びをもって創造活動に取り組むことができる授業展開に努める。	<ul style="list-style-type: none"> ○ 授業のねらいを明確にした上で、材料・用具や表現方法について幅をもたせ、児童生徒が主体的に自己選択や自己決定をすることができる授業の展開を工夫することが大切です。 ○ 児童生徒同士がかかわり合う活動を取り入れることにより、自他のよさを発見し、意欲的に創造活動に取り組める授業の展開をしましょう。作品への思いを伝え合うような言語活動を授業の中で行うことも大切です。
3 児童生徒一人一人の自分らしさやよさを自覚し、意欲的・意図的に創造活動に取り組める評価を工夫する。	<ul style="list-style-type: none"> ○ 育成する資質や能力、題材やねらいを踏まえ、指導内容・評価基準を明確にして評価することが大切です。 ○ 授業のねらいを基に、児童生徒自身の自己肯定感が高まる評価場面と評価方法を工夫しましょう。 ○ 児童生徒が互いのよさを認め合える自己評価や相互評価を行いましょう。

⑧ 体育、保健体育

指導の重点	実践上のポイント（○） 関連する事業等（※）
1 12年間を見通しながら領域及び内容の取扱いを踏まえ、バランスのとれた指導計画を作成し、基礎的・基本的な内容の確実な定着と体力の向上を図る。	<p>○ 学校や児童生徒の実態を十分に考慮するとともに、小学校と中学校との学びの連携・接続の観点から学習内容がより円滑につなげられるような指導計画を作成することが大切です。また、運動量が十分に確保できるように指導過程を工夫し、運動意欲と体力の向上を図りましょう。</p> <p>○ 準備運動や補助運動では、運動身体づくりプログラムの活用について工夫を凝らすことによりマンネリ化を防ぐとともに、楽しく継続していくことができるようにしましょう。</p> <p>※ 体力・運動能力調査と体力向上推進計画、自分手帳の活用を図りましょう。</p> <p>※ 運動身体づくりプログラム講座を活用しましょう。</p> <p>※ 小学校体育専門アドバイザー派遣を活用しましょう。</p>
2 主体的な学習を通して健康を保持増進する基礎を培い、生涯にわたって豊かなスポーツライフを実現するよう指導方法の改善・充実を図る。	<p>○ 基礎的な運動の繰り返しや、多様な運動の特性に触れることで動ける体づくりに努め、指導後の児童生徒像をイメージした指導計画や単元構想に基づき授業づくりを工夫しましょう。</p> <p>○ 学習課題を明確にし、自ら考えたり工夫したりしながら課題を解決する学習や体を動かす機会を適切に確保した上で、互いに学び合うなどのコミュニケーションを図る学習活動を充実させましょう。また、ICTや学習カードの活用を通して課題を明確にするとともに、知識を実践的に活用する学習活動となるようにしましょう。</p>
3 目標の実現状況を的確に把握し、指導の充実を図る。	<p>○ 児童生徒の学習の様子を確実に観察し、具体的に助言するなどフィードバックする機会を多くすることや、学習後には、どんな力を身に付けたかを振り返り、次につながる授業づくりをしましょう。</p> <p>○ 本時の目標やめあてと学習過程における評価との整合性が図られるようにしましょう。</p>
4 保健・安全指導の充実を図り、事故を防止する。	<p>○ 事前に十分に健康状態を把握し、個に応じた適切な指導を行うとともに、運動種目の特性から運動の負担の大きい種目や危険性のある種目（運動）の場合は、導入時だけでなく展開時にも注意深く健康観察を行いましょう。</p>

⑨ 家庭、技術・家庭

指導の重点	実践上のポイント（○）関連する事業等（※）
1 家庭生活を総合的にとらえる視点や自立的に生きる基礎を培う観点から指導計画を改善する。	○ 小学校と中学校との学習内容が効果的に接続するように指導計画の見直しと体系化を図りましょう。 ○ 実生活の課題と実践について、どの時期にどんな内容と関連させて履修させるかを明確にしましょう。
2 日常の生活との関連を図り、実践的・体験的な学習活動や問題解決的な学習を充実する。	○ 学習過程では、資料提示を可視化する工夫、電子黒板やパソコン（タブレット等）の活用をさらに推進していきましょう。 ○ 日常生活と関連づけた具体的な指導になるようにするとともに、日頃から課題意識を持たせ、その解決に向け自ら考え、判断し実践する力や態度が育まれるようにしましょう。
3 学習指導に生きる評価に努める。	○ 本時のねらいと学習過程における評価との整合性が図られるようにしましょう。 ○ 指導と評価の一体化を図るため、評価の内容や方法の改善、年間や単元、一単位時間の具体的な評価計画の作成に努めましょう。
4 事故防止のため、安全管理と安全指導を徹底する。	○ 日頃から設備・用具の手入れや保管等を適切に行い、学習環境の整理・整頓を心がけましょう。 ○ 生肉・生魚等を取扱う場合は、食中毒予防のために細心の注意を図りながら授業を進めましょう。（中学校 家庭分野）

⑩ 外国語（英語）

指導の重点	実践上のポイント（○）関連する事業等（※）
1 3年間を通して外国語（英語）の目標の実現を図るため、生徒や地域の実態に応じて系統的な指導計画を作成する。	○ 単元指導の考え方（単元をどうとらえ、どのような力を身に付けさせたいのかなど）を明確にした上で技能ごとの活動や統合的に活用する言語活動を構想しましょう。 ○ 3学年を通して4技能を総合的に育成できるよう、技能ごとの活動やそれらを統合的に活用する言語活動を生徒の実態や教材の特質に応じて位置付けていきましょう。 ○ 理解から習得に至るには時間がかかるものがあります。そのため生徒の習得状況を継続的に把握する（モニターする）ことが必要です。定着確認シートの「指導のポイント」も参考にしてください。
2 コミュニケーション能力の基礎の育成を目指し、生徒が主体的かつ意欲的に学ぶことができる授業を創造する。	○ 生徒の学びを見取るとともに継続的に言語活動を仕組み、質的に充実させましょう。さらに身に付けた言語材料から適切なものを選択する能力、正確に使用する能力などを育成する場面も設定しましょう。 ○ 生徒が「見通す」「振り返る」場面を設定することで、自律的学習者として主体的に学び続ける姿勢の育成につなげることができます。
3 指導と評価の一体化を図る。	○ 「英語を使って何ができるようになるのか」という観点から「CAN-DOリスト」を作成・活用し、指導と評価、そして授業の改善につなげましょう。 ○ 評価方法は多種多様です。学習活動の質や目的に応じて、生徒の学習状況を的確に評価できる方法を選択しましょう。

⑪ 道 徳 (小・中)

指導の重点	実践上のポイント (○) 関連する事業等 (※)
1 学校や児童生徒の実態を踏まえた実効的な指導計画を作成するとともに、学校全体で取り組む推進体制を確立する。	<p>○ 全体計画・別葉の重点事項を重視しながら全教師で取り組むとともに、小・中学校が連携して児童生徒の道徳性を9年間で育成できるよう連携することが大切です。</p> <p>※ 道徳推進校（岩江中学校）の公開授業や地区別推進協議会での情報交換を基に、自校の取組のよさを伸ばし、道徳的判断力・心情・実践意欲をバランスよく指導することが大切です。</p>
2 道徳教育の「要」としての役割を踏まえ、道徳の時間における多様な指導方法・指導体制等を工夫し、道徳的实践力の育成を図る。	<p>○ 「ふくしま道徳教育資料集」や「私たちの道徳」、副読本等の資料を、ねらいに応じて効果的に活用することが大切です。</p> <p>○ 児童生徒が、ねらいとする価値を自分との関わりで深く自覚できるよう、資料分析、発問、板書、導入・展開・終末の構成、振り返りの仕方、多様な指導法の工夫等について研究し、実践力を高めていくことが必要です。</p> <p>○ 発達段階に応じ、授業で動作化や役割演技、ペープサート等を取り入れ、価値への理解が深まるよう工夫することが大切です。</p> <p>○ 児童生徒の考えを引き出し、つなぎ、問い返すような発問や、多様な考えに触れながら自分自身を見つめ直すことができるような話合いになるよう、児童生徒主体の授業になるよう工夫することが大切です。</p> <p>○ 終末に道徳ノートやワークシート等を活用した振り返りの場を確保し、児童生徒が考えを整理したり、新たな気づきで成長を実感したりできるよう工夫することが大切です。</p>
3 家庭、地域社会等との連携を図りながら、開かれた道徳教育をさらに推進する。	<p>○ 授業参観等で道徳の授業公開をしたり、地域人材や素材の活用、学校からの情報発信によって家庭や地域にも道徳教育の内容が伝わるよう、ホームページや学校通信等を活用していくことが大切です。</p>

⑫ 外国語活動

指導の重点	実践上のポイント（○） 関連する事業等（※）
1 外国語活動の目標と趣旨を的確に捉え、児童や地域の実態に応じて各学年の目標を適切に定め、2学年間を通して目標の実現を図るよう年間指導計画を作成する。	<p>○ 各教科等の内容、学校行事、道徳、地域素材等の活用、2学年間を通した弾力的な指導など、自校化を図った指導計画を作成することにより、外国語活動を児童にとってより一層魅力あるものとすることができます。</p> <p>○ 今後の小学校外国語活動の教科化等を見据え、校内研修等により全職員で目指す方向性や指導方法などについて共通理解を図りましょう。</p>
2 外国語で積極的にコミュニケーションを図りながら、言語や文化について体験的に理解を深め、外国語の音声や表現に慣れ親しむよう児童主体の授業を創造する。	<p>○ 外国語というフィルターを通すことで相互理解につながったり、自己理解を深めたりすることができます。そして児童や授業者の強みを生かせる単元構成・授業構成を工夫しましょう。</p> <p>○ 英語を「使う」ことでコミュニケーションがさらに促されたり、言語や文化の違いに気付かせたりする授業展開も考えられます。</p> <p>○ これまでの実践で自校化された教材を効果的に用いながら各校のよさを生かした実践につなげていきましょう。</p> <p>※ 教育センター主催による外国語活動講座が開催されますので、ぜひご参加ください。</p>
3 指導と評価の一体化を図る。	<p>○ 児童の学びや気付きを的確につかむため、丁寧な見取りを行いましょう。</p> <p>○ 教師が適切にかかわることで児童の学びを促すだけでなく、児童の学びを評価したり、教師自身の指導を評価する機会にもなります。</p> <p>○ 求める姿と比較して児童の学びはどうだったか、手立ては有効だったかなどの視点を持つことで、指導の改善につなげましょう。</p>

⑬ 総合的な学習の時間（小・中）

指導の重点	実践上のポイント（○） 関連する事業等（※）
1 地域や学校、児童生徒の実態等に応じ、特色ある全体計画や指導計画を作成する。	<ul style="list-style-type: none"> ○ 地域や学校、児童生徒の実態に即して、全教育活動と関連させながら、学習の目標及び内容、育てたい資質や能力及び態度を明記した全体計画を作成しましょう。 ○ 学習内容を定めるにあたっては、教師が育てたいとする資質や能力及び態度を明らかにして、全職員の共通理解のもと行うことが重要です。
2 学校の創意工夫を生かした探究的な学習活動を展開する。	<ul style="list-style-type: none"> ○ 学習の目標を達成するために、探究的な学習が展開できるようにするとともに、体験的活動や言語活動を適切に位置付けたり、他者と協同して課題を解決する学習を設定したりしましょう。 ○ 教職員のかかわり方について振り返りを持ち、児童生徒の学びに応じた学習活動を随時修正していきましょう。
3 児童生徒の主体的な学習を支える評価に努める。	<ul style="list-style-type: none"> ○ 学校における評価の観点を基に、実現が期待される児童生徒の姿を想定し、児童生徒の変容について評価しましょう。 ○ 児童生徒が、自らの探究の過程を振り返り、どんな力が身に付いたかを自己評価したり相互評価したりして、自らの学びや成長を実感させるようにしましょう。

⑭ 特別活動（小・中）

指導の重点	実践上のポイント（○） 関連する事業等（※）
1 各学校の課題に基づき、創意工夫を生かし自主的、実践的な活動が助長されるような指導計画を作成する。	<ul style="list-style-type: none"> ○ 自主的、自発的な活動を助長していくために、児童生徒の自治的・自発的活動が系統的行われるよう、学校全体の特別活動の在り方を見直し、組織的な取組を行っていきましょう。 ○ 各教科、領域で育てたい資質・能力と関連付けて、自校の特別活動の内容や計画を見直していきましょう。
2 児童生徒による自主的、実践的な活動が充実するよう指導内容の重点化を図り指導方法を改善する。 〔各内容〕 ○ 学級活動 ○ 児童会・生徒会活動 ○ クラブ活動（小学校） ○ 学校行事	<ul style="list-style-type: none"> ○ 国立教育政策研究所教育課程研究センターのリーフレット、指導資料（小・中学校）を積極的に活用し特別活動の基本的な内容について研修を行って共通理解を図り、児童生徒による自主的・実践的な活動を充実させていきましょう。 ○ 児童生徒の自主的な活動によって、学級活動の計画や運営が進められるよう、オリエンテーションの場と時間を位置付け、活動の意義や進め方などを指導していきましょう。 ○ 一人一人に役割を与え、児童生徒がよりよい学校生活づくりに参画しているという意識が持てるようにしていきましょう。 ○ クラブ活動のねらいに合った活動を計画するとともに、必要な時数を確保し、自発的・自治的な活動ができるようにしていきましょう。 ○ 学校行事が形式的なものにならないように全職員でねらいを共有し、児童生徒の自主的、実践的な活動を取り入れた行事にしていきましょう。

(2) 各種教育

① 生徒指導（小・中）

指導の重点	実践上のポイント（○）関連する事業等（※）
1 自校の実態に即した具体的な指導計画に改善し、機能的な生徒指導体制を確立する。	<p>○ 自校の課題の明確にし、解決策を具体化するとともに、全教職員で指導方針や共通実践事項を共有し、実践することが大切です。</p> <p>○ 課題解決に向けて、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカー等と連携を図ったり、関係機関を有効活用したりする指導計画に改善していくことが必要です。</p>
2 教育活動全体において、すべての児童生徒に積極的な生徒指導を進める。	<p>○ 教育活動全体を通して、自己決定の場や自己存在感を味わうことができる場を設定するなど、生徒指導の機能を積極的に発揮できるように工夫することが大切です。</p> <p>○ 児童生徒の思いや心情に寄り添った日常的な関わりや指導を通して、児童生徒理解に努めるとともに、教師と児童生徒、児童生徒同士の好ましい人間関係づくりに努め、より温かい学級の雰囲気醸成していくことが大切です。</p>
3 教育相談の充実を図る。	<p>○ 児童生徒一人一人の心情に寄り添った教育相談を充実させるために、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーを積極的に活用し、教職員が連携し一体となって自校の実態に即した組織的で実効性のある教育相談体制を確立することが大切です。</p>
4 いじめ等の問題行動等の未然防止と早期解決、問題行動発生時の確な対応に努める。	<p>○ 児童生徒一人一人との日常的な触れ合いや観察、教職員同士の情報交換、諸調査等を活用して、よりきめ細かな実態把握に努めるとともに、いじめや不登校等の問題行動の未然防止・早期発見・早期対応に努めることが大切です。</p> <p>○ 学校いじめ防止基本方針や対策のための組織が、全教育活動を通して機能する実効性のある取組となるよう、PDCAサイクルを生かした日常的な見直し・改善が必要です。</p>

② キャリア教育（小・中）

指導の重点	実践上のポイント（○）関連する事業等（※）
1 学校や児童生徒の現状を把握し、目標を立て、課題を明確にして指導計画を作成・改善する。	<p>○ 各学校の児童生徒の実態に応じながら、キャリア教育の視点で各教科、道徳との関連を更に図りながら、それぞれの取組をつないだ指導計画の作成により、視点を一層明確にするとともに自校化を図り、学校全体でキャリア諸能力の育成に取り組んでいくことが大切です。</p> <p>○ これまでの教育活動、地域人材や素材を活用し、実態に合った指導計画に改善していくことが大切です。</p>
2 キャリア教育の推進組織・体制を確立し、共通理解に立った指導に努める。	<p>○ 教員間での情報共有や組織的にかかわる機会を設け、キャリア教育担当者を中心とした校内の推進組織や体制の確立を図っていくことで、組織的な指導力の向上に努めることが大切です。</p> <p>○ 小学校では、学級担任が各教科等を見渡しやすいという特性を生かして、キャリア教育の視点で教科等をつなぎ体系的に取り組む指導体制づくりを進めることが大切です。</p> <p>○ 中学校では、教科部会や生徒指導部会と連携した推進体制の構築が大切です。</p>
3 学校、家庭、地域社会や関係諸機関との連携を一層強化する。	<p>○ 児童生徒のキャリア発達に関する情報については、その実践の工夫改善に関する情報を小中（高）で連携しながら確実に引き継ぎ、支援や計画作成につなげていくことが大切です。</p> <p>○ 普段身近にいる人々との日常的な交流を通して、自分の役割を果たしながら、児童生徒が自分らしい生き方を見つけられるように、学校と家庭・地域がより一層連携した体制づくりが必要です。</p> <p>※ 専門高校と小・中学校のキャリア教育連携事業が実施されます。</p>

③ 図書館教育（小・中）

指導の重点	実践上のポイント（○）関連する事業等（※）
1 学校図書館の活用を図った指導計画を作成・改善する。	<p>○ 児童生徒が年間を通して学校図書館を積極的に活用するために、学校図書館の学習・情報センターとしての機能を授業で活用したり、関連読書や発展読書などで教科等の学習と読書を結び付けたりするよう指導計画を充実することが大切です。</p> <p>○ 読書量調査や図書紹介等、委員会活動等と関連付けながら、児童生徒が主体的に読書推進できるよう工夫することが大切です。</p> <p>○ 教職員や外部団体による読み聞かせやブックトーク等、学校全体で読書活動が推進され、図書館がより身近に感じられるよう工夫することが大切です。</p>
2 蔵書や資料等の充実を図り、学校図書館の機能や役割を生かす整備充実に努める。	<p>○ 学校図書選定委員会等の機能を生かし、教科等の学習資料として図書を計画的に購入したり、自治体の資料を収集したりするなど、図書を児童生徒の学力向上や豊かな心の育成に生かすために学校全体で整備充実を図ることが大切です。</p> <p>※ サポートティーチャーによる読書支援も活用してください。</p>

④ 人権教育 (小・中)

指導の重点	実践上のポイント (○) 関連する事業等 (※)
1 人権を尊重する意識を高める教育を推進するための指導方法・内容を明確にする。	<p>○ 教育活動全体を通じて人権教育が推進されるよう、「人権教育の指導方法等の在り方について〔第三次とりまとめ〕」を基に、各学校で校内研修の機会を設け、人権尊重の考え方や指導方法について共通理解を図ることが大切です。</p> <p>○ 人権感覚の涵養に向け、道徳の時間とのより一層の結び付きや各教科等との関連を明確にし、学校教育全体で人権を意識した指導を充実させていくことが大切です。</p>
2 学校生活の中で人権尊重の感覚を身に付けることができるよう児童生徒のよさや可能性を尊重した指導を工夫する。	<p>○ 日常的に児童生徒一人一人のよさを見つけ、認めようとする態度や、学級全体で互いを思いやり、尊重し、生命や人権を大切に意識や態度などを育てる指導を通して、人権意識の基礎が芽生えるよう、その基盤となる価値観を伸ばす指導を充実させることが大切です。</p> <p>※ 人権教育推進事業公開授業研究会（田村市常葉地区）にも積極的に参加しましょう。</p>
3 指導の効果を高めるための評価を工夫する。	<p>○ 学校評価の評価項目を人権教育の視点から捉え直し、保護者や地域が学校の取組を理解し、児童生徒の実態を共有できるように改善していくことが大切です。</p>

⑤ 環境教育 (小・中)

指導の重点	実践上のポイント (○) 関連する事業等 (※)
1 総合的・系統的な指導計画を作成する。	<p>○ 地域や学校の実態を生かした活動や体験を通じて、実感の伴った環境教育の在り方について考え、推進していきましょう。</p> <p>○ 環境教育へのアプローチは各教科や道徳、特別活動及び総合的な学習の時間など様々です。環境問題に主体的にかかわる態度や幅広い実践力の育成のために地域や学校、児童生徒の強みを生かした実践を行っていきましょう。</p>
2 児童生徒が主体的に考え判断し行動できる資質や能力を高める指導方法の工夫改善を図る。	<p>○ 地域社会や家庭との連携において身に付けたい力を明確にしたり、E S Dとの関連において育むべき力を明確にしたりすることにより、「体験」そのものから「体験から得られる学び」へと発展させることができます。この学びで得た力を、家庭や地域社会で生きる力につなげていきましょう。</p> <p>○ 地球環境問題と地球温暖化防止の意義を理解し、学校の実態に応じた地球温暖化防止活動への取組として「福島議定書」への参加も効果的です。</p>

⑥ 情報教育 (小・中)

指導の重点	実践上のポイント (○) 関連する事業等 (※)
1 情報化に対応した教育を推進するために、指導体制の充実を図る。	○ 授業のねらいを確認し、ねらいに沿った情報機器の活用を行う。授業の学習課題を解決するためのツールとしての役割を明確にし、どのような可能性があるのかを教員間で確認する必要があります。
2 児童生徒の主体的な学習活動を支援するコンピュータ等の活用及びインターネット等の適切な利用について指導の工夫する。	○ モバイル機器を含めた、効果的な利用方法やSNSを利用する上での具体的な事例を累積するとともに、各教科・領域の指導目標や内容を確認し、適切に情報モラルについての指導を徹底する必要があります。

⑦ 国際理解教育 (小・中)

指導の重点	実践上のポイント (○) 関連する事業等 (※)
1 学校や地域の実態に応じて、特色ある指導計画を作成する。	○ 外国籍児童生徒への支援を機に関係機関との連携を深めたり、地域人材とのつながりを広げたりすることができます。学校や地域にある資源を活用することで、「異なる文化との出会い」ができるという視点から国際理解教育を進めていくことが大切です。
2 我が国の伝統と文化を尊重し、広い視野から国際理解を深め、国際社会に生きる日本人としての自覚を高める。	○ 地域の伝統や文化、産業などが身近なものというだけではなく、外国に向けて発信可能な意味あるものであると捉えることで各教科等の学習を国際理解教育へとつなげることができます。 ○ 人権の尊重と国際協調の精神の涵養については、道徳との関連を図りつつ他者理解・尊重とも関連させながら各教科等においても意図的に扱うことで、認識を深めていくことができます。 ※ 中学生・高校生の国際理解・国際交流論文朝河貫一賞の募集が行われます。県教育委員会のホームページでは最優秀論文が掲載されています。
3 外国の人々との相互理解を深める交流の場と機会を拡充し、積極的にコミュニケーションを図ろうとする意欲と態度を育てる。	○ 国際理解教育には異文化理解・受容とともに自己の文化・意見発信の両面があります。また、交流することによる新たな価値・文化への気付きも重要です。それらを踏まえ、各教科等でどのように扱い、いかに関連付けるかという視点から活動内容を工夫していきましょう。多様性の受容という視点からのアプローチも大切です。 ※ 多文化共生・国際交流・国際理解・国際協力について考えるふくしまグローバルセミナーが開催されています。

⑧ へき地・小規模学校教育（小・中）

指導の重点	実践上のポイント（○）関連する事業等（※）
1 児童生徒の実態を踏まえ、学校の特色及び地域の特性を生かした指導計画に改善する。	<p>○ 児童生徒の実態を十分に把握し、実態に応じた指導計画や単元を通して「確かな学力」の育成に向けた指導計画を立てましょう。さらに、評価を適正に行い指導の改善に生かすことが必要です。</p> <p>○ 地域素材の教材化や人材活用、他校等との交流学习などの体験的な学習を工夫して、少人数のよさを生かした弾力的な指導計画にしましょう。</p>
2 児童生徒一人一人の特性を生かした教育活動を展開し、授業の充実を図る。	<p>○ 児童生徒一人一人の特性に応じた学習や学習形態を工夫することで、児童生徒の主体的な学習の充実を図りましょう。</p> <p>○ 思考力・判断力・表現力を育成する視点で、目的を明らかにした言語活動に取り組みせ、一人一人の「確かな学力」の向上を図りましょう。</p>
3 児童生徒の自己実現を図る評価を工夫する。	<p>○ 目指す児童生徒の姿を踏まえて、評価方法を工夫し、指導と一体化した評価に努めましょう。</p> <p>○ 複式学級における児童生徒だけで学ぶ「わたり」の時間においては、教師と児童生徒が、学習の過程や終了時における姿を共有することが充実につながります。学んだことが実感できる評価を工夫することで自律した学びのできる児童生徒の育成につながります。</p>

⑨ 健康教育（小・中）

指導の重点	実践上のポイント（○）関連する事業等（※）
<p>【保健】</p> <p>1 保健学習・保健指導の充実を図り、健康を保持増進するための実践力を育成する。</p> <p>2 健康相談・個別指導の充実を図り、個別の健康課題解決のために支援する。</p>	<p>○ 体育科・保健体育科の授業における保健学習や、特別活動における健康教育との関連をしっかりと持たせた指導が重要です。</p> <p>○ 自校及び個々の健康課題を明確にするとともに、学校・家庭が一体となった健康教育活動を推進しましょう。</p> <p>○ 校内及び地域の学校保健委員会の組織を更に効果的に機能させましょう。</p> <p>○ 児童生徒の食生活と運動、睡眠などについて改善するとともに基本的な生活習慣の確立が図られるようにしましょう。</p>
<p>【安全】</p> <p>安全指導の充実を図り、危険を予測し、回避する能力を育成する。</p>	<p>○ 学校の実情に応じて様々な場面を想定し、緊急時に適切に対処できるよう訓練の在り方を工夫するとともに、訓練の実施後はマニュアルの有効性を評価し、見直しを十分に行うことで、実効性のあるものへと改善していきましょう。</p>
<p>【食育・学校給食】</p> <p>「ふくしまっ子食育指針」に基づき、「食べる力」「感謝の心」「郷土愛」を育成する。</p>	<p>○ 食育推進コーディネーターを中心として、校内委員会の活性化や学校保健委員会の活用、学級担任や栄養教諭等による教科等での指導など学校全体で共有化を図り、指導体制を整え、指導の充実努めましょう。</p> <p>○ 給食の時間における食育については、教科等における指導内容との関連を図りながら、年間を通じて計画的、継続的、組織的に指導できるようにしましょう。また、家庭の理解と啓発を図っていきましょう。</p>

⑩ 防災教育（小・中）

指導の重点	実践上のポイント（○） 関連する事業等（※）
1 学校や地域の実状及び児童生徒の実態に応じながら教育課程の全体構造を念頭に置いた指導計画の充実を図る。	<ul style="list-style-type: none"> ○ 教育課程に位置付けた計画的かつ継続的な防災教育とともに地域・関係機関を巻き込んだ防災体制づくりと訓練を行う計画を作成しましょう。 ○ 危険等発生時対処要領や防災計画を災害発生時に生かしていくための共通理解を図る場を位置付けましょう。
2 児童生徒が状況に応じ、主体的に考え判断し行動する態度や能力を高めるための指導の充実を図る。	<ul style="list-style-type: none"> ○ 各教科、総合的な学習の時間、道徳など、各教育活動の中に防災教育の視点を取り入れ、実際の生活場面とつながる場を設定することによって教科等のねらいも効果的に達成し、防災における思考力・判断力・行動力も高める指導を行っていきましょう。 ○ 「防災教育指導資料（平成25・26・27年度版）」「防災個人カード」を活用しながら、保護者や地域と連携し、具体的な行動等、多様な場面を想定した指導や学習の場を設定していきましょう。
3 安全で安心な社会づくりに貢献する意識を高める指導を工夫する。	<ul style="list-style-type: none"> ○ 地域での人とのつながりが防災で大切なことを踏まえ、社会参加や社会貢献等、地域の中での積極的な交流を通し、地域の一員としての自覚を高め、その役割を果たすとともに、地域住民との日常的なコミュニケーションを密にする教育活動を展開していきましょう。

⑪ 放射線教育（小・中）

指導の重点	実践上のポイント（○） 関連する事業等（※）
1 学校や地域の実状及び児童生徒の実態に応じた指導計画及び指導内容を工夫し、実践する。	<ul style="list-style-type: none"> ○ 県教育委員会の放射線指導資料等を基に教育課程や学校安全計画、学校保健計画等に位置付け、学校全体で組織的、計画的に指導していく必要があります。 ○ 各学年においては、学級活動や教科等で時数を確保し、発達に応じた内容を実践していきましょう。
2 放射線等の基礎的な知識や身の回りで行われている復興への取組を基に、自ら考え、判断し、行動する力を育む指導方法を工夫する。	<ul style="list-style-type: none"> ○ 文部科学省の「放射線等に関する副読本」や県教育委員会の「平成27年度放射線等に関する指導資料（第5版）」などを効果的に活用しましょう。 ○ 放射線の利用や影響について、実践協力校の授業を参考にしたり実験をしたりして科学的な根拠を基に考え、判断、行動する態度の育成に努めましょう。
3 放射線から身を守り、健康で安全な生活を送ろうとする意欲と態度を育てる。	<ul style="list-style-type: none"> ○ 事故後5年が経過し、当時の記憶が薄れつつあります。放射性物質を体に取り込まないようにするための方法や、放射線から身を守る方法を確実に身に付けさせ、いつでもどこでも自ら考え、判断し、行動できる児童生徒の育成を教育活動全体で取り組んでいきましょう。